

FT_{DX}401

取扱説明書

八重洲無線株式会社

目 次

定 格	2
付 属 品	3
設 置	3
パネル面の説明	4
シャーシ背面の説明	5
使 用 方 法	6
回 路 の 説 明	10
各 部 の 調 整	17
アクセサリーの紹介	22
保 守 に つ い て	26
申請書類の書き方	28
パ ー ツ ・ リ ス ト	30

このセットについて、または、ほかの当社製品についてお問い合わせ、ご連絡をくださるときは、右記宛をお願いいたします。このセットについてのお問い合わせ、ご連絡のときは、かならずセットの番号（シャーシ背面にはつてある名板および保証書に記入してあります）をあわせてお知らせください。また、お手紙をいただくときは、あなたのご住所、ご氏名は忘れずお書きください。

郵便番号 ① ④ ⑤ - □ □

東京都大田区久が原1丁目2番15号

八重洲無線株式会社

営業部営業課またはサービス課

電話番号 東京 (03) 753-6141 (代表)

郵便番号 ⑤ ⑤ ⑥ - □ □

大阪市浪速区日本橋東5丁目15番27号

八重洲無線株式会社

大阪サービスステーション

電話番号 大阪 (06) 643-5549

FT_{DX} 401 取扱説明書



FT_{DX}401型SSBトランシーバーは、SSBのYAESUとして全世界のハムに親しまれている八重洲無線が、永年内外のハムのご愛用をいただいたFT_{DX}400型トランシーバーを、さらに一歩進めて、ノイズ・ブランカー回路、冷却ファン、CW用クリスタル・フィルターなどを組込んだ最高級のSSBトランシーバーです。

FT_{DX}401は80メートルバンドから10メートルバンドのすべてのアマチュアバンドで、SSB、CWのQSOができるほか、JJY、WWVなどの10MHz帯の標準電波の受信ができ、さらに若干の追加部品を取りつけることにより、任意の500kHz幅の2バンドの送受信ができます。

FT_{DX}401の終段定格入力は430W、D.C.と我が国のSSBトランシーバーでは最大のパワーをほこり、このパワーで余裕のある運用を実現するための終段管冷却用ファンを備えています。

FT_{DX}401はさらに、最新設計のノイズ・ブランカーで外来パルス性雑音を完全にシャット・アウトし、クリアーなCWオペレーションを実現する600Hz幅クリスタルフィルターを内蔵しているなど多くの特長を備えています。

FT_{DX}401にはまた、専用スピーカーSP-400、外部VFO FV-401、50MHz帯トランスバーターFTV-650、スタンド型マイクロフォンYD-844、クールリニアFL2000B、グランドリニアFL2500など豊富なアクセサリによって、より広範囲、より快適なオペレーションが約束されています。

この素晴らしいFT_{DX}401のオーナーとなられたあなたにできるだけ長くこのセットをご愛用いただくため、この取扱説明書を作りました。ご使用いただく前によくお読みになり、正しい使い方でFT_{DX}401を可愛がってくださるようお願いいたします。

定 格

送受信可能周波数範囲

80mバンド	3.5～4.0MHz
40mバンド	7.0～7.5MHz
20mバンド	14.0～14.5MHz
15mバンド	21.0～21.5MHz
10mバンドA	28.0～28.5MHz
10mバンドB	28.5～29.0MHz
10mバンドC	29.0～29.5MHz
10mバンドD	29.5～30.0MHz
JJYバンド(受信のみ)	10.0～10.5MHz

ほかに、7.5～28.0MHzの任意の2バンド追加可能(いずれも500kHz幅)

電波型式

SSB (A_{sj}) LSB, USBの選択可能
CW (A₁)

終段入力

430W D.C.

アンテナ入出力インピーダンス

50～75Ω 不平衡

搬送波抑圧比

-40dB以上

側帯波抑圧比

1000Hzにおいて-50dB以上

不要輻射強度

-40dB以上

第3次変調歪

-31dB以上

送信周波数特性

300～2700Hz, ±3dB以内

冷却方式

強制空冷

周波数安定度

ウォームアップ後、任意の30分間において、100Hz以内

受信感度

14MHz, SSB, 0.5μV入力でS/N20dB

イメージ比

50dB以上

中間周波妨害比

50dB以上

選択度

SSB : 2.4kHz (-6dB)
4.2kHz (-60dB)

CW : 0.6kHz (-6dB)

1.2kHz (-60dB)

低周波出力インピーダンス

8Ωおよび600Ω, いずれも不平衡

低周波出力

歪率10%のとき, 1W以上

電源

100V, 50～60Hz. 内部配線変更によって
110, 117, 200, 220, 234Vで使用可能

消費電力

受信時140VA, 送信時最大550VA

ケース寸法

高さ160×幅400×奥行き350(mm)

重量

約18kg

使用電子管

真空管

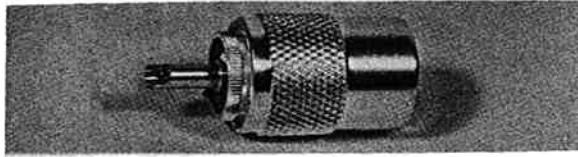
6AH6	1本
6BA6	3本
6BE6	1本
6BM8	1本
6BZ6	2本
6CB6	2本
6GK6	1本
6KD6	2本
6U8	1本
12AT7	1本
12AU7	2本
12AX7	1本
7360	1本
VR105MT	1本

定電圧放電管

使用半導体素子

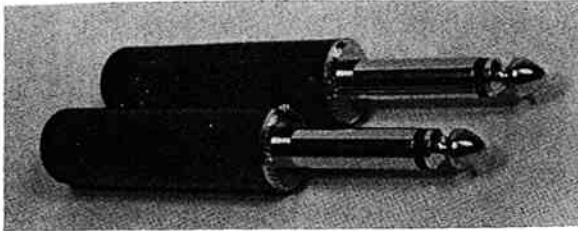
可変容量ダイオード	1S145	1本
定電圧ダイオード	WZ061	1本
	WZ090	2本
	WZ110	1本
ゲルマニウムダイオード	1S1007	9本
シリコンダイオード	1S1555	3本
	1S1941	8本
	1S1943	2本
	1S1944	6本
	10D10	8本
トランジスタ	2SC372	4本
	2SC504	1本
	2SC735	4本
	2SC783	1本
	2SC1047	1本
電界効果トランジスタ	2SK19	2本
	2SK24	1本
	2SK34	1本
	3SK22	1本

付 属 品

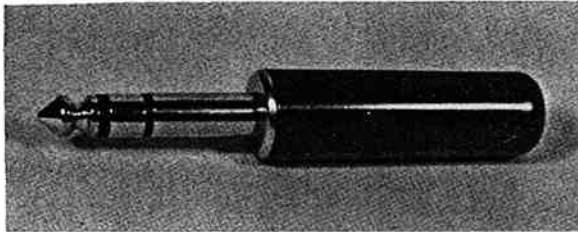


FTDx401には、つぎのような付属品がついてきますので、これらのものがすべてついていることをお確かめください。万一不足しているものがあれば、お求めいただいた販売店または直接当社にご連絡ください。

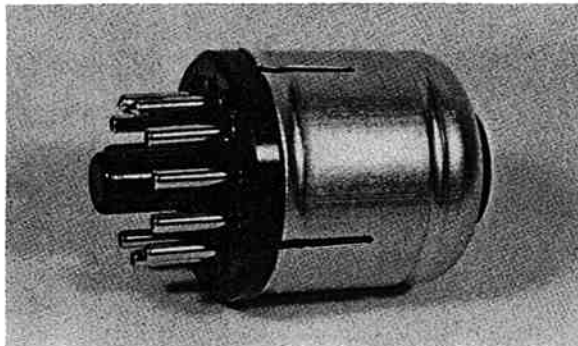
同軸プラグ JPL-259……………1個
アンテナを接続するための同軸プラグです。本体のアンテナ・ジャックに合わせてインチねじのものを付属させてあります。



フォンプラグ(2P) S-H3001……………2個
2端子のフォンプラグで、1個はヘッドフォン、イヤフォンなどをパネル面のPHONESジャックに接続するために、もう1個は電鍵をシャーシ背面のKEYジャックに接続するために使用してください。



フォンプラグ(3P) S-H3601……………1個
3端子のフォンプラグで、PTT(プッシュ・ツー・トーク)スイッチ付きのマイクロフォンを接続するために使います。PTTスイッチのついていないマイクロフォンを使うときは1端子を遊ばせておきます。



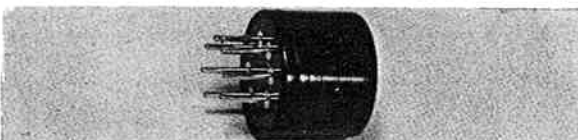
アクセサリプラグ PA-602B……………1個
FTV-650型トランスバーター、FV-401型外部VFOなどを接続するための11ピンプラグです。何も接続せずにトランシーバーを動作させる場合はピン1とピン2をショートしてあるままでシャーシ背面のACCソケットに挿しておいてください。これを挿していないときは終段出力管のヒーターに電圧がかからないため、送信することができません。



RCAプラグ CN-7017……………5個
トランスバーターをドライブするための出力端子RF OUT、外部VFOからの入力を接続する端子VFOの各ジャックに接続するプラグです。



調整棒……………1本
本体内の各コイルに使っている六角孔つきコアを回すためのコア・ドライバーです。



7Pプラグ S-17302……………1個
外部VFOに電源を接続するソケットVFO POWER ソケットに接続するプラグです。

設 置

アンテナについて

FTDx 401の送信部出力インピーダンスは50Ω～75Ωの範囲の負荷に整合するように設計されています。従ってトランシーバーに接続する点のインピーダンスがこの範囲内にあるアンテナであればどのような型式のものでもそのまま使うことができますので周囲の条件に合わせてご自由にお選びください。上記の範囲外のインピーダンスのアンテナを使う場合は、アンテナ端子と給電線の間にアンテナ・カップラーなど適当なインピーダンス変換器をいれてアンテナ端子に接続される点のインピーダンスを50Ω～75Ωの範囲におさめてお使いください。

フィーダーとして同軸ケーブルを使うときは、5C-2V、7C-2V、5D-2V、RG-8/Uなど、伝送損失の少ない良質のものをお選びください。

アースについて

感電事故などの危険を未然に防ぐためにも、また、スプリアス輻射を少なくして質の良い電波を発射するためにも、良好なアースをとることは大切なことです。市販のアース棒、銅板などを地中に埋め、十分に太い線で、できるだけ短かくセットのGND端子に接続してください。場合によっては水道管が良いアースとして使えますが、**ガス管、配電用のコンジットパイプなどは絶対に使わない**よう注意してください。

電源について

FTDx 401は100V、50～60Hzの商用交流電源に接続するようになっています。電源コードのプラグを接続するコンセントまでの配線には10A以上の電流容量をもつコードで安全な配線をしてお使いください。無理なタコ足配線、通常の使用状態で熱をもつような細すぎる配線などの危険な電源で使うことは避けましょう。

FTDx 401の電源トランスの1次巻線は復巻方式を採用してあるため、内部の配線を変えることによって100Vのほかに、110V、117V、200V、220V、234Vの5種類の電源電圧に適合させることが

できます。電源事情の異なる外国で使用するときあるいは動力用電源に接続する場合などにご利用ください。

設置場所について

セットを長もちさせるために、またセットの性能をフルに発揮させるために、セットの置き場所には十分気をつけてください。

つぎのような場所は適当ではありません。

◎直射日光、暖房装置からの熱、熱風が直接あたる場所。

◎湿気の多い場所。

◎ほこりの多い場所

◎風通しの悪い場所。

このような場所を避けて、さらにセットの上、後はできるだけ広くすき間をあけて通風のよい状態でご使用ください。

動作させる前のチェック

FTDx 401を動作させる前につぎのようなことがらを一応チェックしてください。

- (1) パネル面のつまみ、スイッチなどはすべて正常にまわりますか。
- (2) セットの周囲に、セットの動作に支障を与えられるような傷はついていないでしょうか。前面、両側面、背面、上面および底面のすべてをチェックしてください。
- (3) パネル面および背面のジャック、ソケット類に、それぞれに合う付属のプラグを挿入してみてください。すべてうまくはいきますか。場所によっては最初に挿し込むとき、やや硬いものがあるかもしれませんので、やや強い力で入れてみてください。
- (4) 背面のVR（可変抵抗器）には外部からみて損傷はありませんか。これらは工場ですべて調整済みですから、回してみることはしないでください。
- (5) 上部のふたをとって念のため、真空管が正常にささっているかどうかチェックしてみてください。

周波数（ダイヤル）の読み方

さらに操作する前に、ダイヤルの読み方をよく覚えてください。

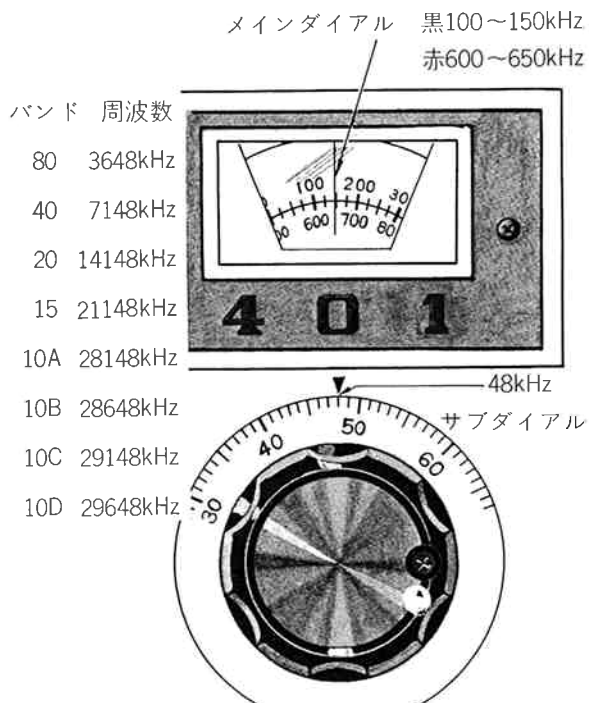
周波数を読みとるには、メインダイヤル（上側の枠の中）とサブダイヤル（同調つまみの周囲）の両方のダイヤルの指示の組合せで読みます。

同調つまみを右へまわすと、ダイヤルは両方とも右にまわり、周波数は低くなります（VFOの発振周波数は高くなる）

メインダイヤルには黒と赤の2色の目盛があり000～500kHzのバンド（40, 20, 15, 10A, 10C）は黒目盛を読み、500～1000kHzのバンド（80, 10B, 10D）では赤目盛を読みます。目盛の色とバンドスイッチの数字の色は同じ色にしてわかりやすくしてあります。黒目盛は000～500、赤目盛は500～1000の各500kHzの間を25kHzごとに目盛っており、100kHzごとに数字をいれてあります。

サブダイヤルの目盛は1種類で、1回転を100等分してあり、1目盛が1kHzになります。数字は10kHzごとにいれてあります。

周波数の読み方の一例を第4図に示します。



メインダイヤルはBANDスイッチが黒表示のバンドでは黒目盛、BANDスイッチが赤表示のバンドでは赤目盛を読む。
サブダイヤルは全バンド共通目盛。

第4図 ダイヤルの周波数の読み方

受信操作の方法

以上述べたように、動作させる前の準備がすべて終わったら、POWERスイッチをOFFにした後、電源コードのプラグを電源に挿し込みます。

電源をつないだら、つぎの順序にしたがって受信操作をしてください。

SSBを受信する場合、3.5MHz、7Mz バンドではLSB、14MHzバンド以上ではUSBで通信するのが国際的な慣例になっています。

①パネル面の各つまみ、スイッチをつぎのようにセットします。

MODE……………受信しようとするモード
VOX GAIN……………STBY
キャリブレータースイッチ……………OFF
セレクトスイッチ……………NOR
AGCスイッチ……………SLOW
AF GAIN……………0
CLARIFIER……………OFF
同調つまみ……………受信しようとする周波数付近
BAND……………受信しようとするバンド
RF GAIN……………10
PRESELE……………5
それ以外のつまみ……………受信操作には関係がないので、どの位置でもかまいません。

②POWERスイッチをONにします。

メーターとメインダイヤルのランプが点灯し、明かるく照らされます。

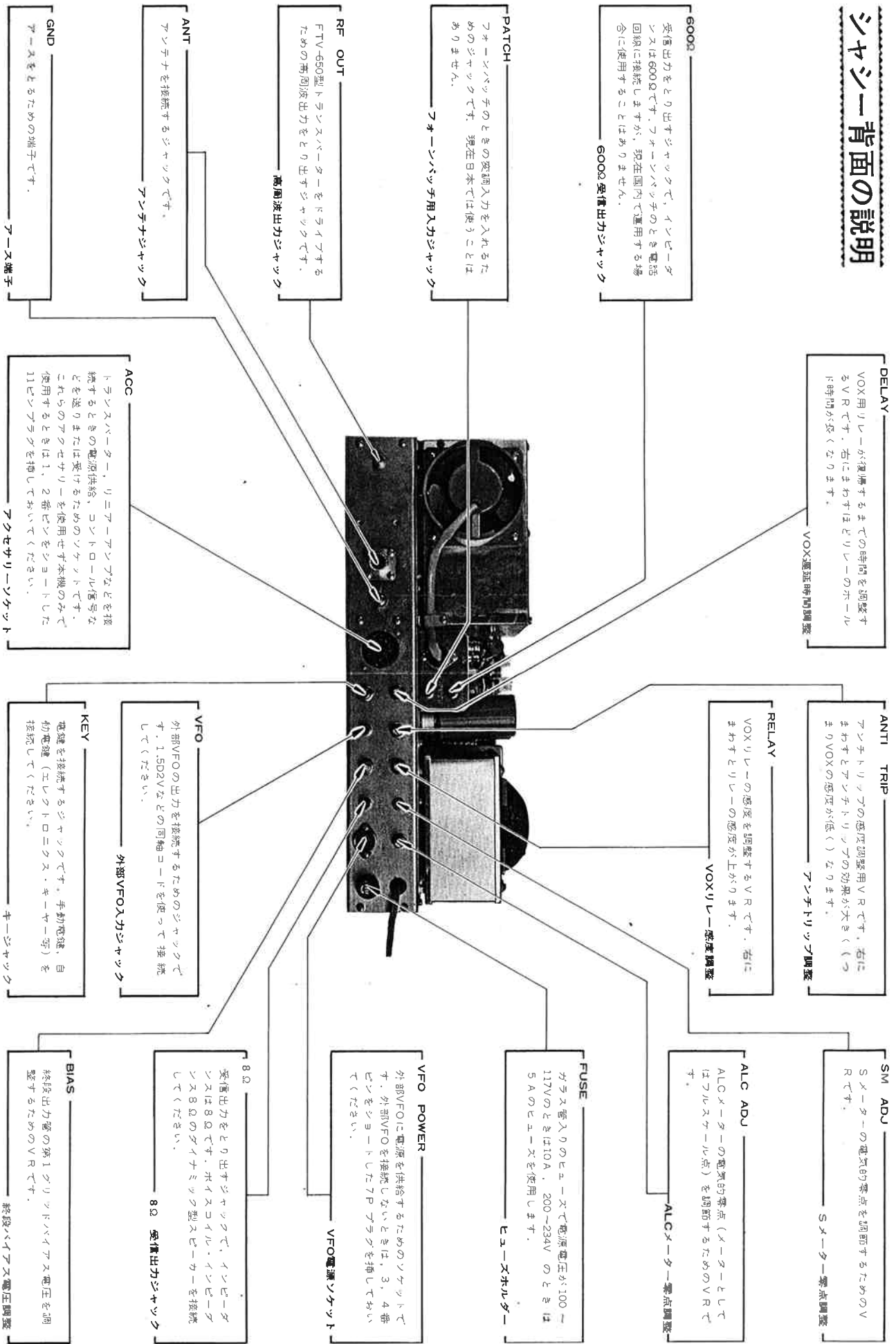
③30秒ほどたつと、真空管のヒーターが暖まり、メーターの針が振れます。

④AF GAIN を右にまわしていくと、スピーカーからノイズまたは信号がきこえるので適当な音量のところセットします。

⑤同調つまみを回していくと信号がきこえますから受信しようとする信号に合わせます。CWのときは受信音が最大になるように、SSBのときは受信音の音調が自然の音声になるように合わせます。

⑥PRESELEつまみを回して受信感度が最大になるようにセットします。同調つまみを回して周波数を変えたときは、必ず再びPRESELE

シヤシー背面の説明



るとき
二利用

トの性
き場所

と接あ

上、後
の状態

ことが

て正

与え
よう
のす

ト類
てみ
場所
のもの
入れ

みて
て調
いでく

正常
てく

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12



パネル面の説明

MODE

電波型式を切換えるスイッチです。
 LSB (Lower Side Band) の受信が
 できます。一般に80、40メートルバ
 ンドではLSBを使います。
 USB (Upper Side Band) の送受信が
 できます。一般に20-10メートルバ
 ンドではUSBを使います。
 CW (電波) の送受信ができます。
 TUNE } : CW (電波) の送受信するときこ
 の位置で行ないます。

モード切換えスイッチ

VOX GAIN

手動による送受信切換え、PTTによる送受切
 換えおよびVOXによる送受切換への選択と、
 VOXの感度調節のためのつまみです。
 MOX (左に回しきった位置) では、手動によ
 る送受切換への送信となります。
 PTT STBYの位置では、手動切換の場合
 は受信となり、PTT (プッシュ・トゥー・ト
 ーク) スイッチによる送受信ができます。
 このつまみをさらに右にまわすとVOXゲイン
 があがってVOX (Voice Controlled Operation)
 による送受切換えができます。

送受切換えスイッチ兼VOX利得調節つまみ

PHONES

ヘッドフォン、イヤホンなどを接続す
 るジャックです。このジャックにプラグをさ
 し込むとスピーカ出力は自動的に切れます。

フォーンジャック

POWER

電源のON-OFFのためのスイッチです。
 ON (上側) : 電源がはいります。
 OFF (下側) : 電源が切れます。

電源スイッチ

MIC

マイクローンを接続するジャックです。

マイクローンジャック

AF GAIN

AFゲイン (音量) 調節つまみ兼ノイズ・フ
 ランク・スイング
 音量を調節するつまみで右にまわすと音が大き
 くなります。
 このつまみを手前に引くとノイズ・フランク・
 が働きます。

AFゲイン (音量) 調節つまみ兼ノイズ・フランク・スイング

メーター切換えスイッチ

送信時のメーターの動作を切換えるスイ
 ッチです。
 P.O. : メーターは相対値指示の周波数出力計
 として動作します。
 I.C. : メーターは終段出力管のカソード電流
 を指示します。
 ALC : メーターはALCの効き具合を指示しま
 す。
 受信時はこのスイッチがどの位置にあっても
 メーターはSメーターとして動作します。

キャリアリレー・スイング

内蔵のローカライズ回路と25kHzマルチバ
 ッチです。
 25kHz : 100kHz 発振回路と25kHzマルチバ
 イナリーターが同時にはたらくいて、
 25kHzごとのローカライズ信号が出ます。
 OFF : ローカライズ動作しません。
 100kHz : 100kHz 発振回路が動作し、100kHz
 ごとのローカライズ信号が出ます。

メーター

送信時にはメーター切換えスイッチによって
 決まる指示 (P.O., I.C., ALC) をし、受信
 時は信号強度を指示するメーターです。

セレクトスイッチ

送信・受信の周波数を内蔵VFO、外部VFOの
 いずれでコントロールするかを選択スイ
 ッチです。
 RX, EXT : 受信外部VFO、送信内蔵VFO
 NOR : 送受信共に内蔵VFOまたは送受信共
 外部VFO
 TX, EXT : 送信内蔵VFO、送信外部VFO

AGC切換えスイッチ

AGCの動作を切換えるスイッチです。
 FAST : AGCの時定数が短くなります。
 SLOW : AGCの時定数が長くなります。
 OFF : AGCがかからなくなります。

メインダイヤル

同調つまみ周囲のサブダイヤルとの組合せて
 内蔵VFOによる送受信周波数を読みとるダイ
 アルです。BAND スイッチの数字が黒色のバ
 ンドでは黒目盛を、赤色のバンドでは赤目盛
 を読みます。AUXバンドを追加した場合はそ
 の周波数によって異なります。

LOADING

終段の負荷調節つまみです。0で軽負荷、10
 で重負荷になります。

ローディング調節つまみ

MIC GAIN / CARRIER

電話 (LSBまたはUSB) の送信のときのマイ
 ク・アンテナのゲインと、電波 (CW) のとき
 のキャリアの量を調節するつまみです。
 いずれも右にまわすと大きくまたは小さく
 なります。

マイクゲイン・キャリア調節つまみ

PLATE

終段出力回路の同調つまみです。数字は送信
 周波数帯の波長を示します。

プレート同調つまみ

PRESELE

受信周波数増幅段と送信ドライバ一段の同調
 つまみです。受信感度が最高になるように調
 節してください。

プリセレクト同調つまみ

RF GAIN

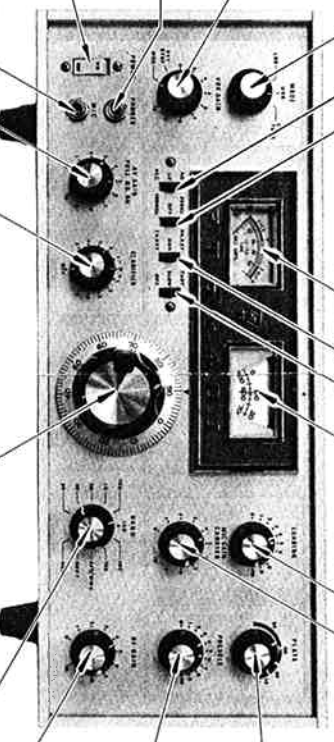
高周波増幅段、中間周波増幅段のゲインを調
 節するつまみです。普通は右にまわしきった
 位置で使ってください。

高周波ゲイン調節つまみ

BAND

送受信周波数帯を切換えるスイッチです。
 数字は周波数帯の波長を示しており、AUX 1
 とAUX 2は任意のバンドを追加するときのバ
 ンドです。

バンドスイッチ



CLARIFIER

クラリファイアー (送信周波数に關係なく受
 信周波数をわずかに変える回路) のON-OFF
 の切換えと周波数の変化量を調節するつまみ
 です。左にまわしきってOFFにすると送受信
 周波数は完全に一致します。
 自盛0の位置でも送受信周波数が同じになり
 右側 (+) の方向にまわすと受信周波数が低
 くなり、左側 (-) の方向では受信周波数が高
 くなります。自盛の数字は周波数の変化量とは
 完全には一致しません。

クラリファイアーツまみ

同調つまみ

内蔵VFOの発振周波数を覚えて送受信周波数
 を変えるつまみです。周囲の円板 (サブダイ
 アル) にはメインダイヤルと組合せて周波数
 を読みとる目盛があり、つまみ約6回転でサ
 ブダイヤルが1回転し、周波数が100kHz 変
 わります。サブダイヤルの目盛は1目盛が1
 kHzになっています。



使用方法

動作させる前の準備

セットを動作させる前には、つぎのことをしてから動作させるようにしてください。

(1) まず、この取扱説明書をよくお読みになってセットの取扱い方を覚えてください。SSBトランシーバーを初めてお使いになる方は特に注意して読み、送信操作については、電源をいれない状態で説明書を読みながら実際の送信操作をするつもりで各つまみなどを回して何度か練習し、送信操作を十分身につけたうえで実際の運用に移ってください。なれないうちは、同調操作などに余分に時間がかかり、一瞬のうちに終段出力管を不良にしてしまうことがよくありますので、上記のご注意をぜひ守っていただくよう、おすすめします。

(2) 背面のACCソケットに付属の11ピン・プラグ（すでにピン1とピン2をショートしてあります）を挿入してください。これがないと送信部終段出力管のヒーターが点灯しませんので送信できません。

(3) 背面の8Ωジャックにスピーカーを接続してください。スピーカーはボイスコイルインピーダンスが8Ω（4Ωから16Ωの範囲のものであれば差支えありません）のダイナミック型を使用してください。専用スピーカーSP-400が最適です。

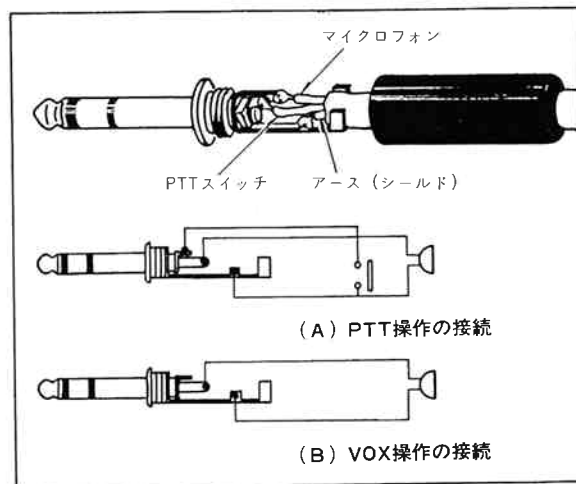
スピーカーの接続には、付属のRCAプラグを使ってください。

(4) 背面のANTジャックにアンテナを接続してください。アンテナについては3ページに説明があります。アンテナジャックへの接続は付属の同軸プラグを使用し、同軸コードで行なってください。

試験電波発射までは、送信部の調整その他送信部を動作させるときは、アンテナのかわりにダミーロードを接続してください。

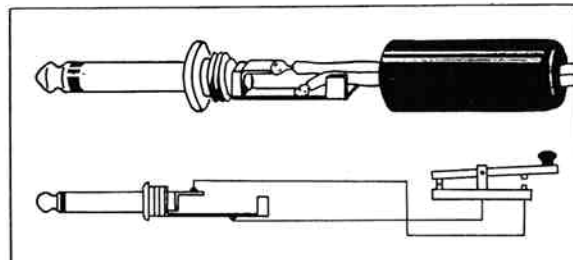
(5) LSBまたはUSBで使用するときは、パネル面のMICジャックにマイクロフォンを接続してください。マイクロフォンはインピーダンスが50kΩのダイナミック型が適しています。マイクロフォンはPTTスイッチのついたものが便利です。

マイクロフォンの接続には付属の3Pプラグを使いますが、3Pプラグとマイクロフォンの接続方法を第1図に示します。



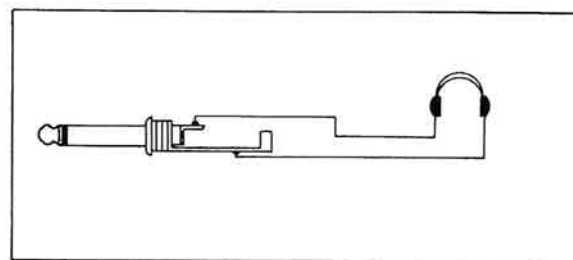
第1図 マイクロフォンの接続方法

(6) CWで運用する場合は、背面のKEYジャックに電鍵を接続してください。電鍵の接続には付属の2Pプラグを使いますが、ごく標準的なタテ型の手動電鍵をプラグに接続する方法を第2図に示しておきます。



第2図 電鍵の接続方法

(7) 必要に応じて、パネル面のPHONESジャックにヘッドフォン等を接続します。これには、付属の2Pプラグを使用しますが、その接続方法を第3図に示します。



第3図 ヘッドフォンの接続方法

(8) 外部VFOを接続しないときは、背面のVFOのPOWERソケットに付属の7ピン・プラグ（すでにピン3とピン4をショートしてあります）を挿入してください。これがないと内蔵のVFOが動作しません。

つまみを回して同調し直してください。

- ⑦ **RF GAIN** つまみを左に回せば、感度を下げることができます。ただし、**RF GAIN**をしばらくとSメーターのゼロ点が移動します。

- ⑧ 自動車のイグニッション・ノイズなどパルス性の雑音があるときは**AF GAIN** つまみを手前に引けばノイズブランカーが動作し、快適な受信を楽しむことができます。

- ⑨ **AGC**は一般にSSBのときは**SLOW**、CWのときは**FAST**としますが、フェーディングなど受信状態によって適当な時定数を選んでください。CWのときは**OFF**にする方がよい場合もあります。ただし、**AGC**を**OFF**にしたときには、Sメーターは動作しませんのでご注意ください。

- ⑩ トランシーブ操作（一つのVFOで送受信）をしているとき、相手局の周波数がずれた場合は、**CLARIFIER** つまみを回すことによって送信周波数を変えることなく受信周波数だけを送信周波数の上下に数kHz変えることができます。

キャリブレーションの方法

本機のダイヤルは、送受信電波のキャリアの周波数を指示しますので、モードを切替えた場合ダイヤルを合わせなおす必要があります。

また、長時間連続して使っているうちには、ごくわずかですが周波数がずれることもあります。

これらの場合には、つぎのようにして、内蔵の

キャリブレータを働かせてダイヤルを合わせることができます。

- ① 前に述べたように受信状態にしたのちに、キャリブレータスイッチを100 KHzまたは25KHzにします。

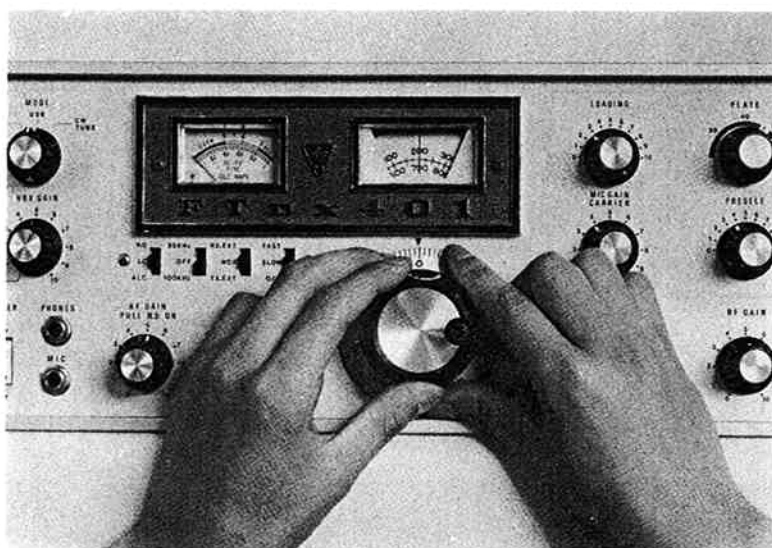
- ② 同調つまみを回すと、100KHzにしたときは、100 kHzごとに、25KHzにしたときは25kHzごとにビート音が聞こえます。

- ③ ダイヤルを較正しようとする周波数にもっとも近い較正点（100 KHzのときは100kHzごと、25KHzのときは25kHzごとの点）の近くに合わせ、ビート音をききながらゼロビートになるように（ビートの周波数がしだいに低くなって最後に聞こえなくなるように）同調つまみを回します。

- ④ ゼロビートの点に同調つまみを片方の手で固定しながら、他方の手で周囲のサブダイヤル板を回して目盛が0になるように（25kHzごとの較正の場合は0、25、50、75のいずれかになるように）合わせます。

- ⑤ これでキャリブレーションはできました。サブダイヤル板から手を離して同調つまみを回せばサブダイヤルはつまみと一諸に回転します。

- ⑥ なお、このキャリブレーション操作をするときは**CLARIFIER**スイッチは必ず**OFF**にしておいてください。



送信の準備操作（予備調整）

アンテナ、アース、電源を接続したのち、つぎの順序で予備調整をします。（予備調整のときはできるだけアンテナの代わりに実際に使用するアンテナと同じインピーダンスのダミーロードを接続して行なってください）

- ①パネル面の各つまみとスイッチをつぎのようにセットします。

POWER スイッチ…………… OFF
MODE…………… TUNE
VOX GAIN…………… STBY
メータースイッチ…………… I. C
セレクトスイッチ…………… NOR
CLARIFIER…………… OFF
同調つまみ……………送信しようとする周波数付近
CARRIER…………… 0
LOADING…………… 0
PLATE……………送信しようとするバンドの目盛
PRESELE…………… 5
その他のつまみは送信操作には無関係です。

- ②POWERスイッチをONにします。
メーターとメインダイアルのランプが点灯し、明るく照らされます。
- ③スピーカーからノイズがきこえるまで待ち（1分以上たってもノイズがきこえないときはRF GAIN, AF GAINをあげてノイズがきこえるようにする）ノイズが最大になるようにPRESELEつまみを調節します。
- ④VOX GAINつまみをMOXにする。
- ⑤メーターの指示が200mA（TUNEと表示してあるところ）になるまでCARRIERを右に回します。
- ⑥PRESELEつまみをメーターの指示が最大になるように回します。このときメーターの指示が200mAをこえるときは、CARRIERをしばって（左に回して）200mA以下になるようにしてください。
- ⑦PLATEつまみをメーターの指示が最小になるところ（ディップ点）に合わせ、VOX GAINをSTBYにもどします。

注意：⑤～⑦の操作はできるだけ手ばやく行なってください。

- ⑧メータースイッチをP.Oにします。

注意：以下⑨～⑩の操作は、それぞれ10秒以内で行なってください。10秒をこえるときは、一たんVOX GAINつまみをSTBYにもどし10～20秒待って繰り返してください。

- ⑨VOX GAINつまみをMOXにし、メーターの指示が最大になるようにPLATEつまみを回してVOX GAINつまみをSTBYにもどします。

- ⑩VOX GAINつまみをMOXにし、メーターの指示が最大になるようにLOADINGつまみを回して、VOX GAINつまみをSTBYにもどします。

- ⑪上記の⑨～⑩を数回繰り返してメーターの指示がそれ以上ふえない最大点を求めます。これで予備調整は終了です。

- ⑫ダミーロードを使用した場合は、ダミーロードをはずして実際に使用するアンテナを接続し、CWで送信するときは、電鍵を接続した2Pプラグを背面のKEYジャックに、また電話（LSBまたはUSB）で送信するときはマイクロフォンを3Pプラグに接続してパネル面のMICジャックに挿入してください。

SSBの送信操作

予備調整を終ったのち、MODEスイッチをLSBまたはUSB（一般に80、40メーター・バンドではLSB、20～10メーター・バンドではUSBを使います）にし、メータースイッチをALCにします。

VOX GAINつまみをMOXにして、マイクに向かって普通の声で話してみてください。メータースケールの緑色に塗ってある範囲内で、指針が声のピークでピクピク動く程度までMIC GAINつまみをあげて（右に回して）送信してください。

メータースイッチをI. Cの位置にすると、メーターの指示は、話をしないと約50mA（IDLEと表示してある）くらいで、話をすると200～250mAくらいまでふえます。

CWの送信操作

予備調整を終えたのち、メータースイッチをI.

C, MODEスイッチをCWにして, VOX GAINつまみをMOXにすれば送信できます. 電鍵を離しているときのメーター指示は約50mA, 電鍵を押えたときは約600mAになります. またキーイングして送信している符号をスピーカーから出るモニター音でモニターすることができますのでキーイングが大変容易です.

送受信切換え操作

送受信の切換えは, 周囲の条件や, あなたの好みによってつぎの方法のうち, いずれかの方法で行なってください.

MOX (MAUAL OPERATION-手動切換え)

VOX GAINつまみをMOXの位置にすると送信状態になり, マイクに向かって話すか, キーイングすれば送信できます.

受信するときは, VOX GAINつまみをSTBYの位置においてください.

PTT (PUSH-TO-TALK-プッシュトーク)

電話 (LSBまたはUSB) でQSOする場合, PTTスイッチ付きのマイクロフォンを使って切換える

方法です.

第1図Aのようにマイクロフォンを接続して, VOX GAINつまみをPTTの位置にセットして使います. PTTスイッチをONにすると送信, OFFにすると受信になります.

VOX (VOICE CONTROLLED OPERATION)

マイクロフォンにはスイッチは必要ありませんがPTTスイッチ付きのマイクロフォンでもさしつかえありません. マイクロフォンは第1図Aまたは第1図Bのように接続します.

MIC GAINつまみを4~6の間にセットし, マイクに向かって話しながらVOX GAINつまみを右にまわしていくと送信に切換わる点がありますから, つまみをこの点にセットします. 以後はマイクに向かって話すか送信状態になり, 一定時間話すのをやめると受信状態にもどります.

ブレークイン・キーイング

CWのときVOX回路を動作させて自動的に送受信切換えを行なう方法で, 電鍵を押さえると送信一定時間電鍵を離していると受信になります.

バンド	周波数	LOADING目盛
80	3500 kHz	1~2
	3575 kHz	2.5~3.5
40	7000 kHz	1~2
	7100 kHz	2~3
20	14000 kHz	4~5
	14350 kHz	4.5~5.5
15	21000 kHz	2.5~3.5
	21450 kHz	2.5~3.5
10A	28000 kHz	3.5~4.5
	28500 kHz	3.5~4.5
10B	28500 kHz	4~5
	29000 kHz	
10C	29000 kHz	4~5
	29500 kHz	
10D	29500 kHz	4.5~5.5
	29700 kHz	

注: 52Ω ダミーロード接続, 最大出力時

第1表 LOADINGつまみの位置

回路の説明

本機のブロックダイアグラムを第6図に示します。受信部は第1局発固定（水晶制御）、第2局発可変（VFO）のダブルコンバージョン・スーパーヘテロダイン構成、送信部は3MHz帯の水晶フィルタを使ったフィルタ・タイプのジェネレータ一部に第1局発可変（VFO）、第2局発固定（水晶制御）のダブルコンバージョン構成となっています。

電源部はすべて内蔵されており、基本回路のほかに、マーカージェネレーター、ノイズブランカー、AGC ALC、VOXなどSSBトランシーバーに必要な補助回路をすべて内蔵しています。

以下、各回路の構成と動作のあらましについてご説明します。

受信部の回路

アンテナ端子にはいった入力信号は送受切換えリレー、入力同調回路を通してRF増幅段6BZ6 (V₁)のグリッドに加えられます。

送受切換えリレーと入力同調回路の間にはいったトラップ (L₈₀₆-C₈₀₆) は第1IFのほぼ中

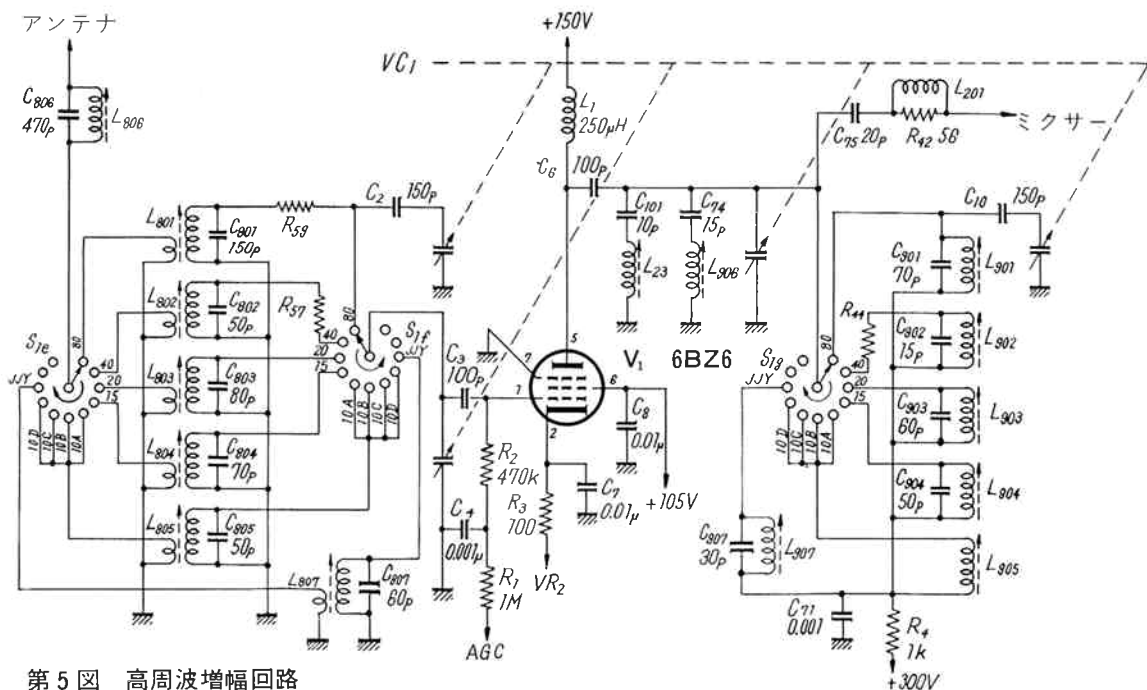
心の周波数（約5770kHz）に同調しており、6020～5520kHzの周波数の信号がRF増幅段を素通りして第1IFに入って妨害を起こすのを防ぐためのトラップです。

また、キャリアプレート用のマーカージェネレータの出力は、マーカージェネレータを動作させたとき、送受切換えリレーと入力同調回路の間に挿入されます。

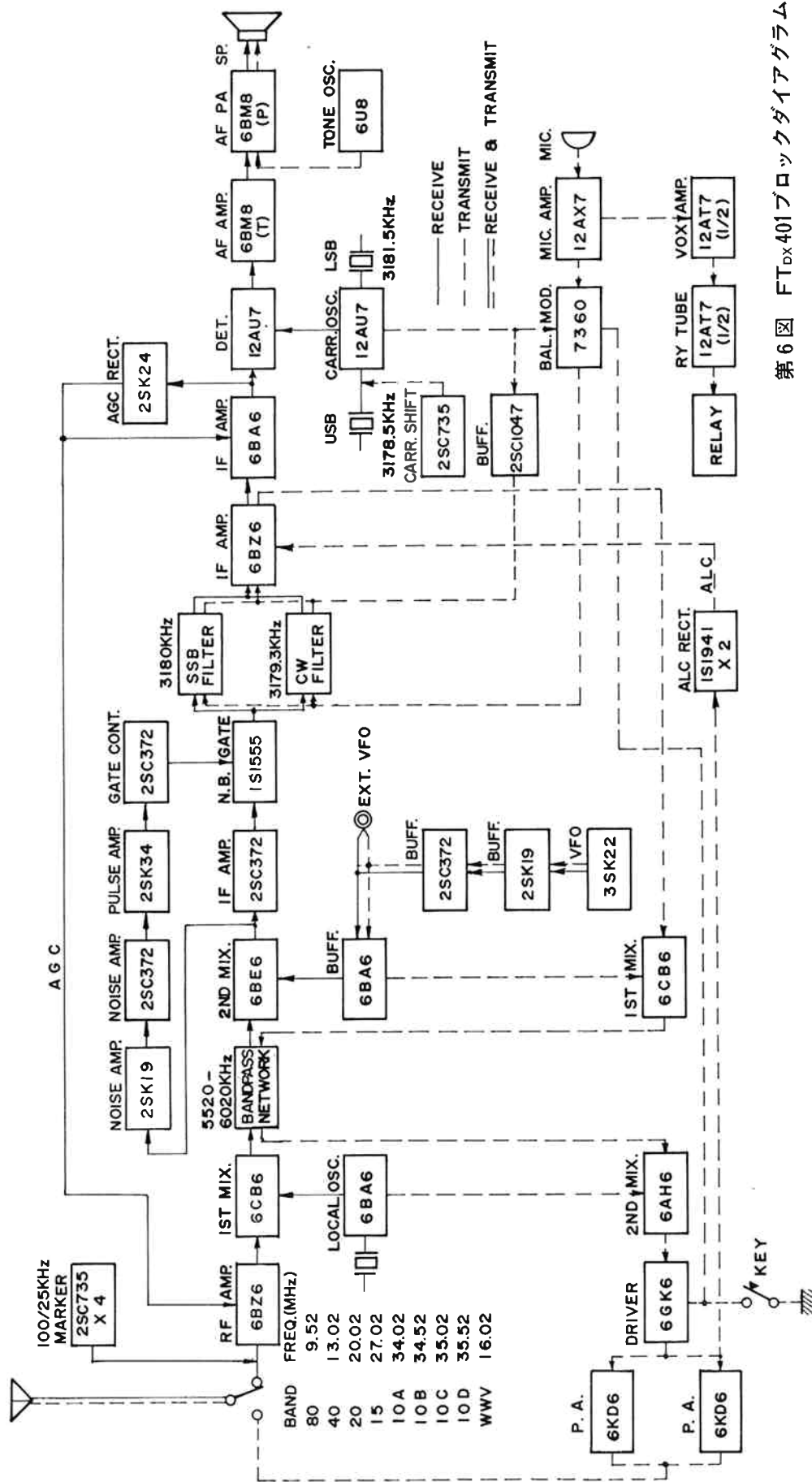
RF増幅段で増幅された信号は段間同調回路を経て第1ミクサー6CB6 (V₂₀₂)の第1グリッドに加えられ、ミクサーのカソードに加えられた第1局発出力と混合され6020～5520kHzの間の周波数（第1IF）としてプレートにとり出されます。

入力同調回路と段間同調回路の同調コイルは、第5図のようにBANDスイッチ (S₁)で切換えられ、各同調コイルには固定コンデンサと6連バリコン (PRESELE VC₁)で同調するようになっています。

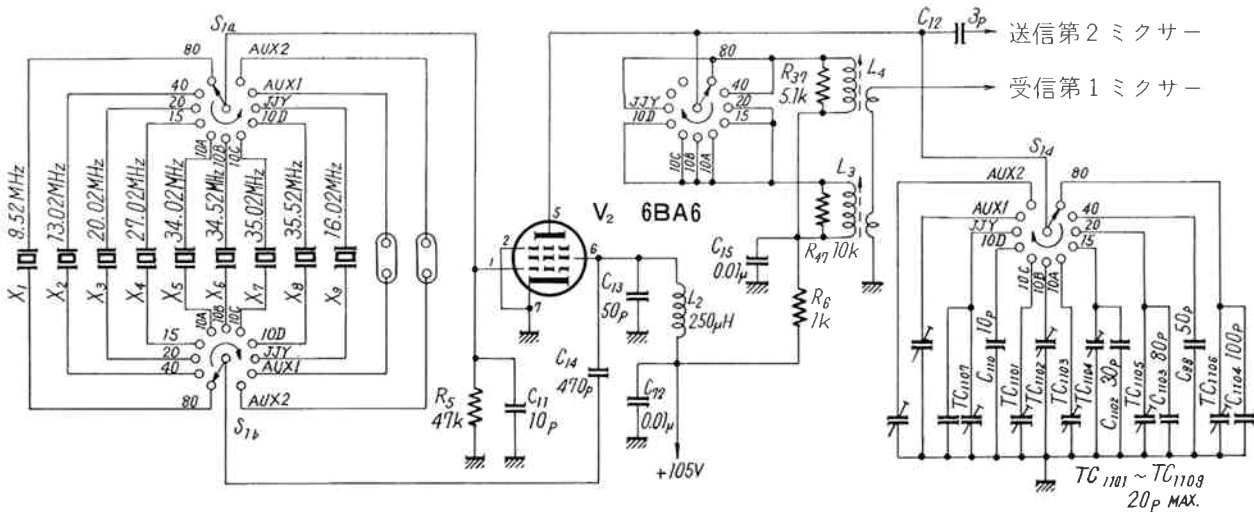
第1局発は6BA6 (V₂)による水晶発振回路です。発振回路は第1、第2グリッドとカソードで



第5図 高周波増幅回路



第6図 FT DX 401ブロックダイアグラム



第7図 局部発振回路

バンド	同調周波数	コイル	コンデンサ
80	9.52 MHz	L ₄	TC ₁₁₀₆ + 100PF
40	13.02 MHz		50PF
20	20.02 MHz	L ₃	TC ₁₁₀₅ + 80PF
15	27.02 MHz		TC ₁₁₀₄ + 30PF
10A	34.02 MHz		TC ₁₁₀₃
10B	34.52 MHz		TC ₁₁₀₂
10C	35.02 MHz		TC ₁₁₀₁
10D	35.52 MHz		10PF
JJY	16.02 MHz	L ₄	TC ₁₁₀₇ + 10PF
AUX 1	—		TC ₁₁₀₈
AUX 2	—		TC ₁₁₀₉

(注) TC₁₁₀₁~TC₁₁₀₉はすべて20PF Max.

第2表 局発出力同調回路

構成される3極管による無調整型の水晶発振回路で、発振出力は電子結合によりプレートから取出します。水晶片の発振周波数は80および40メーターバンドは第7図に示す周波数、20メーターバンド以上は第7図に示す周波数の1/2の周波数でいずれも基本発振ですが、プレートの同調回路(第2表参照)の同調周波数はJJY、80、40メーターバンドは水晶片の周波数、20メーターバンド以上では水晶片の周波数の2倍の周波数に同調しています。つまり20メーターバンド以上では第2グリッド-プレート間で2倍倍しているわけです。

この第1局発の出力はL₃およびL₄のリンクコイルを通して第1ミクサー(V₂₀₂)のカソードに注入しています。

第1ミクサーの出力同調回路はバンドパス特性

をもったバンドパスフィルターで可変周波数の第1IF(6020~5520kHz)に同調しており、このバンドパスフィルターを通った第1IF信号は、第2ミクサー6BE6(V₂₀₃)の第3グリッドに加えられ、ここで、第1グリッドに注入された第2局発(VFO)出力と混合されてプレートに取り出されます。

VFOは接合型電界効果トランジスタ(FET)の3SK22(TR₄₀₁)を使ったクラップ回路で、9200~8700kHzの500kHz幅の安定な発振回路に、同じく接合型FETの2SK19(TR₄₀₂)とシリコントランジスタ2SC372(TR₄₀₃)の2段のバッファアンプを2段共、負荷変動の影響の最も少ないドレイン接地、コレクタ接地で働かせて、完全に負荷の変動が発振周波数に影響を与えることを防いでいます。

さらに、6BA6(V₂₁₁)のバッファアンプで増幅して第2ミクサーに供給しています。VFOの発振周波数を決める共振回路は、良質のステアタイトボビンに巻いた発振コイル(L₄₀₁)と周波数を変えるバリコンVC₄₀₁、周波数可変範囲を調整するエアトリマTC₄₀₁、温度補償のための温度係数を変えるためのスプリットステータ型エアトリマTC₄₀₂そして数個の温度補償用磁器コンデンサによって構成され安定な周波数を保っています。また、これらの発振周波数決定要素にC₄₁₅を通じて接続されている可変容量ダイオードD₄₀₁(1S145)はクラリファイヤーのためのもので、CLARIFERスイッチがOFFのときはD₄₀₁には一定電圧が加えられ、それ以外のときはこれに加える電圧をVR₃で変えて発振周波数を変えるようになっています。

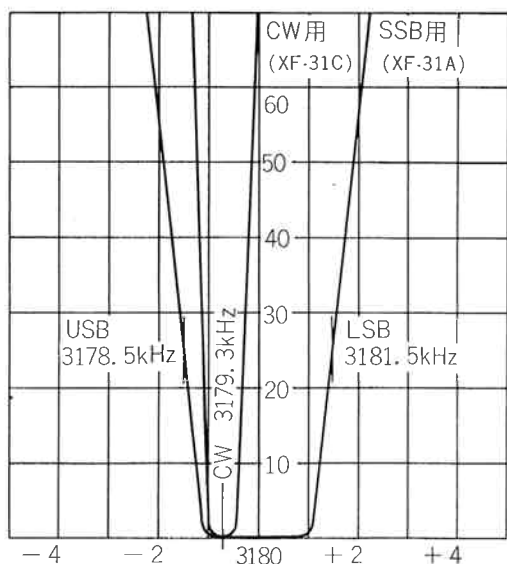
第2ミクサーから取り出された第2IF(3180kHz)の信号は、ノイズブランカーユニットのIFアンプ**2SC372**(TR₃₅₁)で1段増幅され、ノイズブランカー・ゲートを通り、さらにフィルター切換えダイオード・スイッチを通して水晶フィルターにかけられます。

水晶フィルターは、通過帯減幅2.4kHzのSSB用フィルターXF-31Aと通過帯域幅600HzのCW用フィルターXF-31Cの2個のフィルターが装着されており、パネル面のMODEスイッチ(S₄)によって制御されるダイオード・スイッチによって切換えられUSB、LSBのときはSSB用フィルターが、CWのときはCW用フィルターが接続されます。

水晶フィルターを通った第2IF信号は、**6BZ6**(V₂₀₄)と**6BA6**(V₂₀₅)によって増幅されて検波器にはいります。

検波回路は双3極管**12AU7**(V₂₁₃)を使ったプロダクト検波回路で、一方のグリッドにIF信号を加え、他方のグリッドにBFO出力が加えられています。

検波出力は、AF利得調整用VR(VR₉)を通して**6BM8**(V₂₁₀)の3極部の電圧増幅、5極部の電力増幅段で増幅され、出力トランスでインピーダンス600Ωでシャシー背面の600Ωジャックに取り出されます。また出力トランスには8Ωのタップがありこの8Ω出力はパネル面のPHONESジャック(J₃)を通してシャシー背面の8Ωジャック(J₂)に取り出されます。



第8図 水晶フィルターの特性

AGC回路は第2IF出力の一部を**2SK24**で整流して直流電圧をとり出し、これをR F増幅管**6BZ6**(V₁)と第2IF増幅管**6BA6**(V₂₀₅)のそれぞれの第1グリッドに加えて利得をコントロールします。

AGC回路はパネル面のAGCスイッチ(S₂)によってOFFと2種類の時定数とに切り換えることができるようになっています。

送信部の回路

MICジャック(J₁)に加えられたマイク入力はいくつかのマイクアンプ**12AX7**(V₂₀₈)によって2段増幅されMIC GAIN可変抵抗器(VR₆)を通してバランス・モジュレーターに加えられます。

マイクアンプの入力インピーダンスは約50kΩに設計されており、インピーダンス50kΩのダイナミック・マイクロフォンが最も適しています。

バランス・モジュレーターはキャリア・サブレクションと、変調歪の良好なビーム偏向管**7360**(V₂₀₇)を使い、第1グリッドにキャリア、偏向電極にはAF信号を加えています。

LSB、USBのときにはプレートには搬送波が抑圧された両側帯波をとり出し、T₂₀₃を通して水晶フィルターに加えます。VR₂₀₁はキャリアバランス調整用でこれによってバランスを調整して出力に含まれるキャリアの量を最小にします。

CWのときはキャリア発振器の出力はバッファアンプ**2SC1047**(TR₂₀₀₁)を通してIF増幅**6BZ6**(V₂₀₄)に直接加えています。このときV₂₀₇は動作を停止しています。

キャリア発振器は双3極管**12AU7**を使ったピアース水晶発振回路で、それぞれの3極管のG-K間には3178.5kHz、3181.5kHzの水晶発振子が接続されており、S₄で切換えられてLSBのときは、3181.5kHzの発振回路が、その他のモードでは、3178.5kHzの発振回路が動作します。

3178.5kHzの水晶発振子にはCWのときにCW用水晶フィルターの中心周波数(3179.3kHz)に発振周波数を一致させるための周波数シフト回路が接続されています。キャリア・シフト用トランジスタ**2SC735**(TR₀₀₁)はCWの受信時とUSBのときONとなりD₀₀₂(**1S1007**)が導通してC₂₄₆とTC₂₀₉の並列容量が水晶発振子に並列にはいって発振周波数が3178.5kHzになり、CWで送信するときにはTR₀₀₁がOFFになってD₀₀₂がオープンになって、C₂₄₆とTC₂₀₉の並列容量が切離されるため発振周波

数が高くなります。このときの発振周波数はCWフィルターの中心周波数3179.3kHzになるよう調整してあります。

バランスド・モジュレーターの出力は T_{203} を通して水晶フィルターを通して不要な側帯波を取り除いて完全なSSB波になってIF増幅管 V_{204} に加えられます。

水晶フィルターから取り出される信号はLSBではキャリア周波数3181.5kHzの下側帯波、USBでは3178.5kHzの上側帯波、TUNE/CWでは3179.3kHzのCWとなっているわけです。

水晶フィルターを通った信号は、受信部IF増幅と共用のIF増幅管**6BZ6**(V_{204})で増幅され、次段の送信第1ミクサーに加えられます。

このIF増幅段にはALCがかけられており、オーバードライブによる歪の発生を防いでいると同時にALCのかかり具合を監視するために V_{204} のカソード電流をメーターに指示させています。

第1ミクサー**6CB6**(V_{201})の第1グリッドにはIF増幅段の出力とともに、VFOの出力がバッファ**6BA6**(V_{211})で増幅された後、加えられており、ここで両方の信号が混合されて、 V_{201} のプレートには6020～5520kHzの第2IF出力がとり出されます。VFOおよびバッファ・アンプは受信第2局発と共通の回路を使っています。

第1ミクサー出力(6020～5520kHz)は、これも受信部と共通のバンドパス・フィルターを通して、つぎの送信第2ミクサー**6AH6**(V_3)に供給され、同時に第1グリッドに注入された固定局発出力と混合されて差の周波数として目的の送信周波数の信号になります。

固定局部発振回路は受信部第1局発と共通の回路ですが、その出力は C_{12} を通してプレートから直接とり出しており、プレート同調回路は受信部のRF増幅段のプレート同調回路と共用しています。この目的周波数を得るまでの間に、局発周波数の方が高い差のヘテロダインが2回ありますのでサイドバンドの反転が2度繰り返されることになり、送信信号がUSBの場合はジェネレーター部でもUSBを、またLSBのときはジェネレーター部もLSBを発生することになります。

目的の周波数になった信号は、ドライバー段の**6GK6**(V_4)で終段電力増幅管を励振するために必要なレベルまで増幅されて終段をドライブします。この段のプレート同調回路は受信部の入力同調回路と、RF増幅段出力同調兼送信第2ミクサー出力同調回路と連動のバリコン(VC_1)で同調をとっています。

ドライバー段を安定に動作させるため C_{81} によって中和をとっています。

終段部は**6KD6**を2本(V_5, V_6) 並列に接続した直線増幅器で、嚴重にシールドされたケースに収容され、出力同調回路も入力側とは嚴重にシールドして安定な動作をはかりさらに動作を安定にするため TC_1 によって中和をとっています。バンドスイッチによって切替えている $C_{33} \sim C_{35}$ および C_{82} は、各バンドにおける中和のズレを補正するためのもので、これによって各バンドとも完全に中和がとれるよう考慮されています。

カソードには、METERスイッチ(S_7)によってメーターが接続され、2本の終段管のカソード電流の合計値を指示させています。

終段入力 C_{89} を通してRF OUT(J_{11})から外部にとり出すことができ、トランスバーターの励振電圧として使うようになっています。

終段管のヒーター電力はACCソケット(J_5)のピン1と2を短絡することによって供給され、トランスバーターを使用するときは、このピン1と2をオープンにして終段管の動作をとめることができます。

ALCは R_{22} に流れるグリッド電流によって生じる電圧を2本の**1S1941**(D_2, D_3)によって倍電圧整流してマイナスの電圧をとり出し、 V_{204} のグリッド電圧を下げてドライブレベルを制限するように働きます。また、リニアアンプ、トランスバーターなどを組合せて使うときはACCソケット(J_5)のピン7を通して外部からALCをかけることができます。

終段の出力は C_{46} を通してパイ・マッチ出力同調回路に導びかれ、50～75 Ω のインピーダンスでアンテナ・リレーを通してANTジャック(J_4)から取り出されます。

出力の一部は C_{93} と C_{94} によって取り出され、**1S1007**(D_1)で整流してメーターを振らせ、相対値指示の出力計として使います。

付属回路

VOX回路

マイクアンプ12AX7 (V₂₀₈) で増幅された音声入力の一部はVOX GAIN可変抵抗器 (VR₇) を通してさらにVOXアンプ1/2-12AT7 (V_{209A}) で増幅された後、1S1941 (D₂₁₀) で整流されプラスの直流電圧としてリレー制御管1/2-12AT7 (V_{209B}) のグリッドに加えられます。この電圧によるプレート電流の増加がV_{209B}のプレートに直列に接続されたリレーの感動電流に達するとリレーが動作して送信状態になります。

VOXアンプからのAF出力がなくなるとC₂₈₀に充電された電荷はR₂₈₅とVR₁₂を通して放電しC₂₈₀ R₂₈₅ + VR₁₂によって決まる時定数によって一定の電圧まで下がるとリレー制御管のプレート電流がリレーの復帰電流まで減少すると受信状態に戻ります。送信状態から受信状態に戻るまでの時間はVR₁₂によって変えることができます。

CWのときは、VOXアンプの動作は停止し、電鍵を離しているときはR₄₅を通して加えられるマイナス電圧とR₂₈₇、R₂₈₆によって分割されたプラス電圧のバランスを電鍵を押えることによってくずし、R₂₈₆のプラス電圧が1S1941 (D₂₀₂)を通してリレー制御管のグリッドに加わり、リレーを動作させて送信状態にします。電鍵を離すとふたたびR₄₅を通してマイナス電圧がかかりD₂₀₂のアノード側は0VとなるためC₂₈₀に充電されたプラス電圧によってD₂₀₂は逆バイアスとなり、C₂₈₀の電荷はR₂₈₅、VR₁₂を通して放電し、一定の電圧まで下がるとリレーが復帰して受信状態にもどり、セミ・ブレイクイン・キーイングができます。

VOX GAINつまみがPTT/STBYの位置にあるときはR₂₈₄、R₂₈₃によってカソード電位が高く保たれるため送信状態にはならず、MOXの位置ではR₂₈₂の低抵抗を通してカソードをアースしてリレーを動作させ、PTT/STBYの位置ではPTTスイッチをONにしたときだけMOXと同じ状態にしてそれぞれ送信になります。さらにVOXのときはリレーが動作するレベルをVR₁₃によってカソード電位を変えてリレー感度を変えることができます。

トーン・オシレーター

トーン・オシレーター管6U8 (V₂₁₂) はMODEスイッチがTUNE/CWのとき動作し、移相型低周波発振器を構成する5極部で約800Hzの正弦波を発振し、この出力はTONE LEVEL (VR₂₀₃)を通して3極部および6BM8 (V₂₁₀)の5極部で

増幅されスピーカーを鳴らします。

V₂₁₂の3極部のグリッドには、R₂₁₁₃を通してバイアス電圧が加えられており、電鍵を押えたとき0Vとなって、トーン・オシレーターの出力は電鍵を押えたときだけスピーカーから出てきますので、キーイング・モニターとして使えることになります。

マーカ発振器

2SC735 (TR₃₀₁) はピアース発振回路でC-B間に接続された水晶発振子 (X₃₀₁)の周波数100kHzで発振します。発振周波数は水晶片と直列に挿入されたトリマー (TC₃₀₁)によってわずかに変えることができ、正しく100kHzに合わせることもできます。

TR₃₀₁の出力はバッファアンプ2SC735 (TR₃₀₄)に加えられるとともに、2本の2SC735 (TR₃₀₂、TR₃₀₃)で構成するマルチバイブレーターにも加えられます。このマルチバイブレーターはVR₃₀₁によって100kHzに同期させて4分の1の25kHzの発振をします。

キャリブレーションスイッチが100kHzのときは、TR₃₀₁とTR₃₀₄のみに電源が供給され、25kHzのときはTR₃₀₁～TR₃₀₄のすべてに電源を供給します。

TR₃₀₄で増幅された100kHzまたは25kHz(いずれも高次の高調波を含んでいる)は受信部入力に結合され周波数較正用マーカとして利用されます。

ノイズ・ブランカー回路

第2ミクサーの出力、第2IF(3180kHz)はT₃₅₁を通してIFアンプ2SC372 (TR₃₅₁)とノイズアンプ2SK19 (TR₃₅₂)にそれぞれ加えられます。

IFアンプに加えられた信号はTR₃₅₁で1段増幅された後T₃₅₂、ゲートダイオード1S1555 (D₃₅₁)およびT₃₅₃を通して水晶フィルタに加えられます。

一方、ノイズアンプTR₃₅₂で増幅された信号はさらにもう1段2SC372 (TR₃₅₃)で増幅、1S1555 (D₃₅₂)で整流されてC₃₆₈を充電します。C₃₆₈に充電された電荷はR₃₆₃を通して放電しますがこの放電時定数が大きい入力信号の急激な変化(パルス性雑音など)には追いつけないのでほぼ一定電位に保たれます。

ノイズアンプの出力は一方ではC₃₆₆を通してダイオード1S1555 (D₃₅₃)にかかりますが通常パルス性入力のないときにはD₃₅₃は逆バイアスされており2SK34 (TR₃₅₄)はONになっています。このため、ゲート制御トランジスタ2SC372 (TR₃₅₅)はOFFになっていてコレクタ電位が高くゲートダイ

オード D_{351} は導通しているため TR_{351} の出力信号はそのまま T_{353} に接続されます。

この状態のとき TR_{352} にパルス性の雑音入力があると D_{353} が順方向にバイアスされて、ごく短い時間だけ TR_{354} のゲートに負電圧がかかって、 TR_{354} は OFF になります。このため TR_{355} は ON になってコレクタ電位が下がります。一方ゲートダイオードのカソード側の電位は R_{355} と R_{356} によってほぼ一定のレベルに保たれているためゲートダイオードは逆バイアスされた状態になり IF アンプ TR_{351} の出力はここで阻止されて次段に供給されず、この瞬間だけ受信出力がなくなります。

電源回路

ヒーター電源

電源トランスは 2 つの 6.3 V 巻線をもっており一方は ACC ソケットを通して送信部終段管およびトランスバーター、外部 VFO などのアクセサリ用電源を供給し、他方の巻線は、他の真空管のヒーターおよびパイロットランプの電源を供給しています。

低圧 B 電源

240V 巻線の電圧を 1S1944 を 4 本 ($D_{509} \sim D_{512}$) 使ったブリッジ整流回路で整流して +300V の直流電源とし、 V_3 、 V_4 、 V_{208} 、 V_{209} 、 V_{210} 、 V_{212} の 3 極部に供給されます。

また、この 300V を定電圧放電管 VR-105MT (V_7)

で安定化して得た +105V の電圧は、 V_1 の SG、 V_2 、 V_{205} の SG、 V_{206} 、 V_{207} 、 V_{211} の SG に供給されます。

電源トランスの 240V 巻線にはセンタータップがあり、ここから +150V の電圧を得て、 V_1 のプレート、 V_3 の SG、 V_5 の SG、 V_6 の SG、 V_{201} 、 V_{202} 、 V_{203} 、 V_{212} の 5 極部、 V_{213} の各真空管の B 電源としています。

高圧 B 電源

電源トランスのもう一つの B 巻線 (600V) の電圧は 8 本のシリコンダイオード ($D_{501} \sim D_{508}$) によるブリッジ整流回路で整流されて、終段出力管 6KD6 (V_5 、 V_6) のプレート電源になります。

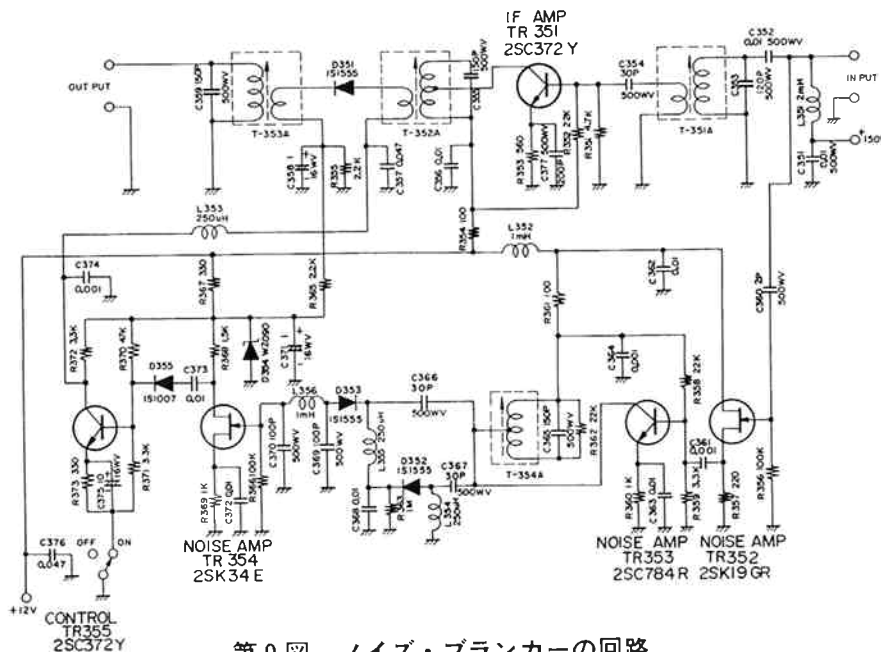
バイアス電源

バイアス電源用の AC100V を 1S1943 (D_{513}) によって整流して得たマイナス電圧は、終段管のグリッドバイアスをはじめキーイング用その他のコントロール用のマイナス電源として供給されています。

トランジスタ回路用電源

VFO の電源は 12.6V 巻線電源の AC 電圧を整流して 2SC372 (TR_{202}) および 2SC504 (TR_{201}) によって構成する安定化電源回路で安定な +9V の電源を得ています。

また、マーカの電源は、上記の整流された電圧を定電圧ダイオード 1S334 (D_{217}) によって安定化して供給します。



第 9 図 ノイズ・ブランカーの回路

各部の調整

お手許のセットは出荷する前に、工場で完全に調整し、厳重な検査をしてありますので、そのまま完全に動作致しますが、長期間ご使用いただいている間に調整した状態が変わることもあり、またVOX動作に関係のある部分のように使用するマイクロフォン、シャックの条件などによって最適な状態に調整しなおす必要があるところもありますので、つぎにシャシー背面の調整用VRなどの調整方法をご説明します。

Sメーターゼロ点調整 (VR₁₀)

本機のSメーターは、メーターのフルスケールがS-0で信号強度にしたがって左の方に指針が振れるようになっています。入力信号がないとき(外来ノイズも含めて)にメーターがS-0を指示しないときは、

- (1) セレクトスイッチをRX EXTにする。
- (2) パネル面のつまみをつぎのようにセットする
VOX GAINつまみ……………STBY

- RF GAINつまみ……………10
- AGCスイッチ……………SLOWまたはFAST

以上のようにしたのちシャシー背面のSM ADJをメーターの指針がS-0になるように調整してください。

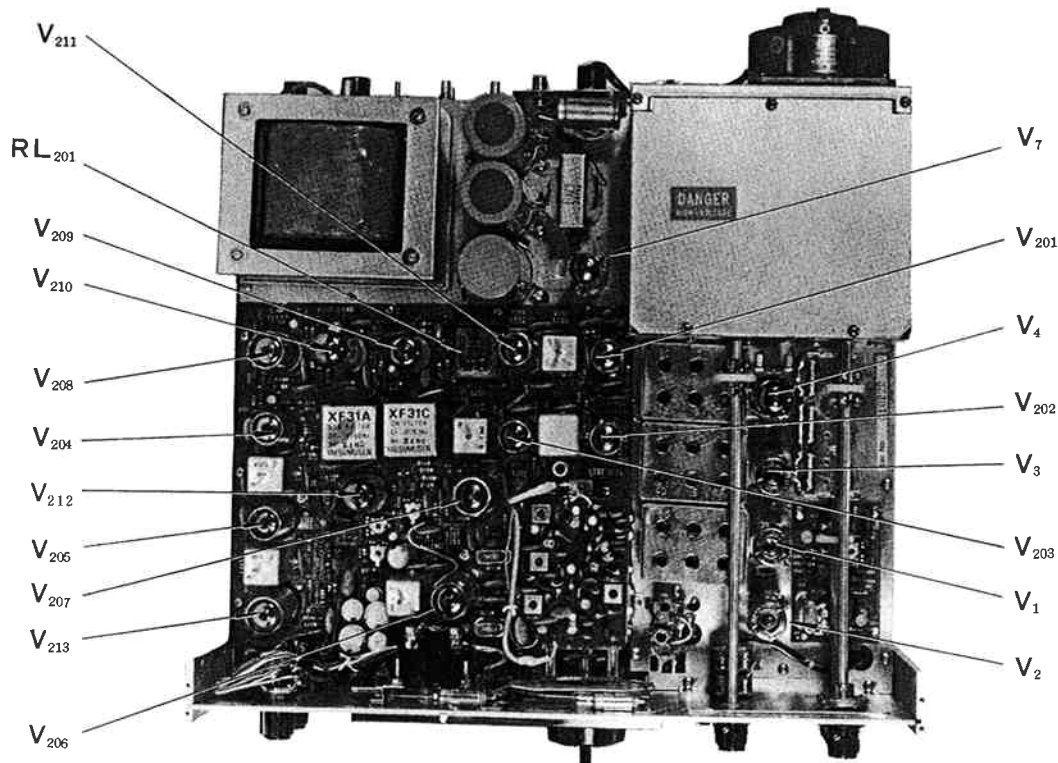
ALCメーターのゼロ点調整 (VR₁)

ALCメーターもメーターのフルスケールがゼロ点でALCがかかるとき針が左に振れます。このメーターのゼロ点の合わせ方はつぎの通りです。

- (1) まず、パネル面のつまみをつぎのようにセットします。

- メータースイッチ……………ALC
- MODEスイッチ……………USB
- MIC GAINつまみ……………0
- VOX GAINつまみ……………MOX

- (2) つぎにメーターの指示がゼロになるように、シャシー背面のALC ADJを調整します。



バイアス電圧の調整 (VR₁₁)

終段出力管のバイアス電圧はつぎのようにして調整します。

- (1) パネル面のつまみをつぎのようにセットします。

MODEスイッチ……………USB
 メータースイッチ……………I. C
 MIC GAINつまみ……………0
 VOX GAINつまみ……………MOX

- (2) つぎにメーターの指示が約50mA (メータースケールにIDLEと表示してあるところ) になるように、シャーシ背面のBIASを調整する。

VOXの調整 (VR₇, VR₈, VR₁₂, VR₁₃)

- (1) まず、任意の周波数で8ページの説明にしたがって送信の予備調整をすませます。

- (2) パネル面のつまみをつぎのようにセットします。

MODEスイッチ……………LSBまたはUSB
 AF GAINつまみ……………0
 MIC GAINつまみ……………0
 VOX GAINつまみ……………STBY

- (3) シャーシ背面のVRをつぎのようにセットします。

ANTITRIP (VR₈) ……………最小 (左一杯)

DELAY (VR₁₂) ……………最小 (左一杯)

RELAY (VR₁₃) ……………最小 (左一杯)

- (4) 以上のようにセットしたのち、RELAYをゆっくりと右にまわしていくと、あるところでリレーがはたらいで送信状態になります。送信状態になったらRELAYを逆に左に少しずつゆっくりとまわすと、ふたたび受信状態にもどるのでここにRELAYをセットします。つまり受信状態から送信状態になる直前にRELAYをセットするわけです。

- (5) つぎにパネル面のMIC GAINつまみを5にセットします。

- (6) マイクに向かって話しながらVOX GAINつまみ (VR₇)を右にまわしていくとある点で音声によって受信から送信に切換わることがありますから、VOX GAINをこの点にセットします。

- (7) つぎに、話すのをやめて近くの周波数で任意の信号を受信し、普通に受信する音量でスピーカーから音が出るようにAF GAINつまみをセットします。そうするとスピーカーからの音がマイクにはいってVOXリレーを動作させて送信状態になってしまいます。

- (8) そこでANTITRIP (VR₈) を右にまわして

